

東京フロイデならではの「第九交響曲」の魅力

小松 長生 + 富澤 裕

指揮者

東京フロイデ合唱団 常任指揮者

独立100周年で
「フィンランディア」を歌う

小松

シベリウス、日本フィルというと渡邊暁雄先生ですよ。僕は駆け出しのころ先生にお会いし、激励を受けたことがあります。指揮のアメリカ留学が珍しい時代ですが、渡邊先生は私のはるか前にニューヨークのジュリアード音楽院で指揮の勉強をされました。だから私がアメリカのイーストマン音楽院に指揮留学をすると申し上げたら、頑張ったらっしょいと励まして下さいました。

後に渡邊先生の指揮する日本フィルのマーラーの交響曲第2番『復活』を聴いてすごく感動した思い出があります。また、シベリウスの第2番も、すごい名演が印象に残っています。そのころから、「フィンランディア」と日本フィルとの深い関わりを知っていましたから、そういう曲を今回やらせて頂くのは感無量です。

富澤

渡邊暁雄先生はお母さんがフィンランドの方で、ご自身にとってもフィンランドがもう一つの母国という思いがあったでしょうし、フィンランド独立100周年である今年、日本フィルと演奏できるのは嬉しいですね。

問題はフィンランド語が団員にとって未知だということですよ。ドイツ語よりは発音もしやすいしむしろ歌いやすいですが、中途半端な演奏はお客様にもフィンランドの方にも失礼になりますから。フィンランド語らしい発音と、ダイナミズムをしっかりと出せるところまで練習し、本番でお見せしたいですね。

「第九」は想像を絶する
激動の中から生まれた

小松

ベートーヴェンは第九交響曲を1822年から24年にかけて作曲しましたが、既に1790年代からシラーに憧れていたと言われています。ヨーロッパの青年たちがすごく感動した戯曲「群盗」(1782年初演)も、ベートーヴェンのシラーへの崇敬の念をかき立て、ずっと書きたいと思っていたのが、ようやく心境というか技量が約30年後に結晶したのではないかと想像しています。ずっと書きたかったのでしょうか。

富澤

1808年の「合唱幻想曲」で試作的なことをやって手応えをつかんでから「第九」に入ったというような感じのことがよく言われていますけれど、そこまで計画的にやったのかなという気もします。初めはドイツ交響曲と言う名前で合唱なしの普通のシンフォニーにするつもりで始めたということも言われていますね。

小松

ベートーヴェンの「荘厳ミサ」(1819~1823)の存在がやっぱり大きくて、無駄がなくて壮麗で凝縮した作品です。ミサ曲は教会ミサという書式・枠組みが決まっています。ところが、「第九」では真っさらな紙にパッと大胆で独自の交響曲の構図を作り上げました。「荘厳ミサ」とも違う境地に入っているなあと感じます。また、あの頃書いていた弦楽四重奏とかピアノソナタの後期の作品群には、何か冥王星とか宇宙の外れまで遠く肉体を離れて魂だけ到達しているという感じがあるので、それとも重なってくるかなと個人的に考えています。

ただ、ベートーヴェンは、1810年代初めまでに交響曲7番とピアノ協奏曲の5番も書き終えており、その頃からだいぶ年月が経っています。

——この時代シラーは、革命の寵児としてもはやされるけれども王室や貴族たちにとってはすごく危険な人物だった訳

で、シラーの作品集そのものが発禁処分を受けたようですから、公然とシラーを取り上げることができなかった時期があるのではないかと思います。どうなのでしょう？

小松

ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンをサポートしていたスヴィーテン男爵は、オーストリアの宮廷図書館館長を皇帝から任され、禁書についてすごく厳しかったと言われています。秘密集会を恐れた夜間外出禁止令もよく出されました。ましてやウィーン宮廷からフランスに嫁いで行ったマリー・アントワネットがギロチン台で処刑されたり(1793年)、ナポレオンが出てきてウィーンが包囲されたり(1805年)して、とてもバリ名譽市民シラーの詩を題材にはできなかったでしょう。アメリカ独立、フランス革命、ナポレオンの台頭など、社会の動きは想像を絶する早さでした。1804年に、ナポレオンが皇帝になって戴冠して、それでベートーヴェンは怒り、ナポレオンへの献辞の書かれていたエロイカ交響曲の表紙から、その献辞を消し去ります。ベートーヴェンはナポレオンを、皇帝制を倒して自由を広める自由の旗手だと思っていたからこそ、怒ったのでしょうか。

富澤

あの時代の人々が生きていた時代というのは今の私たちからは考えられない時間ですよ。社会の動き方だって今より想像を絶するような早さです。

難しい曲なのに
なぜか歌える「第九」の不思議

富澤

はじめから今のような「第九」を書こうとしたのか、交響曲を書こうとしたら「第九」になったのかというのは、なかなかこれは謎ですね、私にとっては。シラーの原詞の

三分の一しか使っていませんし。

小松

ベートーヴェン死後の18世紀前半、フランツ・リストが火付け役になったのですが、特にフランスでベートーヴェンのシンフォニーが盛んに演奏されていました。リストは自分でベートーヴェンの交響曲のピアノ譜を書いたり、ロベルト・シューマンは、フランス語で作った1840年の「ミルテの花」の第1曲「献呈」でもベートーヴェンの「遙かなる恋人に寄せて」を引用したりして、もう一大ベートーヴェン・ブームがフランスで開花したんですね。

メンデルスゾーン、シューマン、リストは、みな友達なんです。1829年にメンデルスゾーンがベルリンで「マタイ受難曲」を演奏したのがきっかけになってバッハが再発見されたんですが、「第九」の第4楽章というのは「マタイ受難曲」のレチタティーヴォ(叙唱、朗唱)のところとオーケストラの景色は全く一緒なんです。

富澤

いつも思うんですけど、もし「第九」がなかったらその代わりに私たちがやれる曲ってないんですよ。「第九」がないからモーツァルトをやろうという訳にはいかない、じゃあヘンデルできるかということこれも簡単にはいかない、演奏技術的にはものすごく難しい「第九」なんです。なぜかあの曲はアマチュアの合唱団にもできるんですよ。本当にベートーヴェンはすごいものを一つ作ってあとの時代を全部変えてしまったという感じがするんですけど。

小松

まあ、ベートーヴェン以外は皆教会の典礼に則った教会の粹の音楽です。ベートーヴェンだけが孤高の存在です。

富澤

毎年、稽古の時にメンバーに話すのですが、「第九」の3楽章まで本当にすごいですよね。ところが4楽章でそれを否定するでしょ。否定する理由の一つもない最高傑作なのにどうしてあそこで否定するのか。これは全く私の考えですけど、ベートーヴェンが一番欲していたのは地位とか名誉とかそういうことではなくて、温かい家庭であったり友だっただろうと思うんですよ。でも最高の音楽を書きながらそれを手に入れていない自分がいて、3楽章まで書いてこんなものを書いたって、自分には友がいない仲間がいない妻もいない子どももない、これはだめだろう。それで世界で一番単純なメロディー、単旋律で四分音符しか出てこない、これだったらみんな歌ってくれるかなと、それまで技術の粋を尽くして書いた1,2,3楽章を否定して世界で一番単純なメロディーを提示してこれでどうだと、それをみんなが歌ってくれて、それが自分の夢の実現なんだみたいなどころに行こうとしたんじゃないかと、私はちょっと思っているんです。

私が合唱指導に訪れた小学校の先生に、学校で「第九」のビデオを見せた時のお話を伺ったことがあります。交響曲というのはオーケストラ曲なんだけど合唱が入っているも





のもあるんだよと、ベートーヴェンという人は耳が聞こえなくなったんだけど頑張って「第九」を書いたんだよみたいな話をしたときに、何で合唱を入れたんだらうねという話になって、一人の子どもが「耳が悪くなった僕でもみんなが歌ってくれれば聞こえるんじゃないかなと思ったのではないか」、とそう答えたと言います。これまたとても素直な素敵な感覚ですね。そういう風に子どもたちに感じさせるものがこの曲の中にあると改めて思いました。

小松

歌ってくれる……、仰ったように、心の中で口ずさむ感じですね。僕はいつも、チェロとベースの有名な主題提示の部分を独吟と言っていますが、独吟していて、気がついたらいつの間にか、現世の人も天国の人も天使も、加わって大展開している感じです。映像的に見えるような凄いシーンです。

富澤

改めてフルスコアを見ると、これ頭の中だけでこの響きを全部イメージしたのかと思うと信じられないですね。

小松先生のレッスンで頂いたお言葉で、自分の「第九」感を変えたことがいくつかあるんですね。“死の試練を受けた一人の友”というのはイエス様のことではないかと言われた、あれは最大の衝撃でした。そうは考えたことが無かった。まさにそうですね。それからM(注)に入る前の転調部分と最後にソリストが転調していくところ、あの和声進行が全く同じだということに気づいていなかったです。もう、あの二つは「第九」の読み方をガラッと変えてくれました。

小松

ロ長調のところですね。ベートーヴェンが「第九」で、ロ長調を楽園を象徴する調性として使いました。ワーグナーが楽劇「トリスタンとイゾルデ」でロ長調イコール天国と位

置づけました。ちなみに、演奏不能として放擲されていた「第九」を、指揮者ワーグナーが猛練習をつけて演奏し、それで19世紀後半から、「第九」の偉大さが人々の知るところとなりました。

温かさが一年一年増してきた

——「第九」は聴くよりも歌うものだとか、毎年歌っていても飽きが来ないと言われます。団員の側から考えると、最初にやった年とはとにかくがむしゃらに歌って終わりますが、2年3年やっている、今度は完成度、自分自身ももっと満足して歌いたいというものが出てくる。そうすると難しさが変わってくる代わりに見えてくる世界が広がってくる。5年10年やっていくうちに、ああこんな曲だったのか、こんな感動があるのか、そういうことに気づいていきます。

富澤

僕は毎年その時出来る最高のことをやろうとしています。自分自身がやっぱり成長するんですよ。10年前とは楽譜の見え方が全く違うんです。毎年毎年練習する中で譜面を読み直しますよね、そうすると前の年に気付かなかったことに必ず何か気が付いてくるんです。なんでこれ去年気づかなかったのかな、こうやって歌ったらもっといいのにといいものが必ず見つかるんですよ。本当に勉強しなければいけないことがいっぱいあるんですよ。自分がそうして勉強して理解が深まってくると余計に曲が好きになってくるんですよ。これは自分自身の成長だと思うのでそれをみんなとも共有したいです。

小松

2,3年前だったでしょうか、僕が「第九」の構造図を書いてお配りしたことがありました。その意図は、ベートーヴェンの構想と設計図を知ることで、一人一人がベートーヴェンと更に通じ合えるんじゃないかなと思っています。壮大、緻密、大胆なことをやっているなど、一目でわかる構造図になればいい、書きました。

富澤

多くのメンバーは音楽理論や音楽史を学んだわけではないので、ああいう手がかりみたいなものを頂けるとああそうだったのかという発見が理解の糸口になっていくと思います。ものすごく有難かったと思います。

小松

僕は今年9回目ですが、ワーッとした温かさが一年一年増して来られたように感じます。富澤先生が丁寧に熱意と愛情をもって指導されていて、毎年レベルが向上しているのはとても素晴らしいことです。新しい人が入ってきて、その方々が温かく中に溶け込んでいる感じがします。指揮する度に、東京フロイデ合唱団が聴衆の温かい声援と信頼を得ているんだな、お客様は本当に感動して帰っておられるなと実感しています。

それと団の運営にも頭が下がります。大変な激務に違いないんですが、色んな背景を持ち、年代も異なる方々が、落ち着いて、プロフェッショナルにやっておられます。東京フロイデ合唱団ならではの事と思います。素晴らしいですね。

富澤

フロイデ合唱団の一番いいところは、やっぱり団の空気だと思います。みんなでやろう、みんなできよう、そしてみんなで最高の喜びをつかもうよという、そういう団の空気がある中にはあります。それが絶対に音に現れるんだと思うんですよ。音大生のような歌声は確かに出ないだろうけれど、彼らには出せない温かさとか心をフロイデは負けずに持っていると思うので。

小松

あと私は、団員の眼が好きなんです。私、超シャイで小っちゃい時から目を合わすのが苦手なんですけど、ちらちらと見ちゃうんですよ。皆さん良い目をされていて、演奏会の時はもちろん練習の時も……。ああいう目をした皆さんだからこそ、ワーッと本当の喜びとか一途さとかがストレートにでた素晴らしい合唱になるのでしょうか。観客として聴きにきた友人が言っていました。フロイデの団員さんたちが壇に上る時の、その歩き姿に感動して涙が出てきたと。みんな風格がある。

富澤

ほんとにそう思いますね。体調の悪い方、足の悪い方も大勢いらっしゃると思うんですが、稽古の時みなさん立っているんですよ。体調悪い時は座っていいんですよと言ってもみなさん立っているんです。それだけやっぱりやりたい、あそこに行ってみたいという仲間があそこできているということなんじゃないかなと。

新入団員の中に演奏を聞いて、ああ自分も歌いたいと思ったという人が必ずいてくれますし、80いくつで初めて合唱をやるという人がいて、今はもう夢の世界ですと。それがやっぱり嬉しいですね。

小松

本番もゲネプロももちろん楽しいですけど、2回寄せて頂く練習も実に楽しくて、いくたびに元気をもらっちゃって、若返るというか(笑)・・・エネルギーを頂戴しています。

富澤

みんなも楽しみにしていますよ。私も初めての方のために期待を煽るようなことも言っていますし。団員が楽しみに待っていますよね。

思い返しますと外山先生が指揮をされていた時に人数が少なかった時期もありましたし、ほんとうに歌えていなかった時もありました。で、演奏会を成立させるためにエキストラとしてプロを何人か頼みましょうかとお相談したこともあるんです。その時に、外山先生は、エキストラはいらない、自分たちが出来る最高のことをすればよいと仰っていただ



いて、それが嬉しくて、だからこそ自分たちがもっともっとうまくならなければならないという方向に向かえました。そして小松先生もエキストラなど一言も仰らなかった。

小松

僕もエキストラのことなど頭に浮かんだこともなかったですね。

——本番の時に、我々が出来る最高のことをやろうと、難しいけれどもそれをやろうと仰っていたのを思い出しますね。

小松

東京フロイデ合唱団は、ずっとコンスタントに本番が最高の演奏で来ているとおもいます。凄いことです。別に、練習が物足りないということではなく、本番をピークに持ってゆく事がいかに大変な事かと分かりますので、素晴らしいなと思っています。漫然と練習してさあ本番だということではなくて、本番で最高の演奏をするんだとの目標を冷徹に見据えるのは重要なことと思います。

富澤

練習でやろうと思ってなかなかうまくいかなかったことが、本番の緊張感と集中力の中で、マエストロやお客さんの力を頂いて、出来るということはあると思うんですよ。ただ、やろうとしてこなかったことが本番で出来るということは絶対にはないですね。だからあくまでも最高の舞台を作ろうというその過程が本番につながるんだと思うので、本番がうまいと思ったら、それだけの時間を踏んできたということだと思います。もっとももっと上手になりたいですね。

注：Mの部分

合唱団がFreude, schöner Götterfunken, Tochter aus Elysium,と歌い始める、一般に「歓喜の歌」とも言われている「第九」の主題部分。

(写真 五味明憲)

東京フロイデ合唱団第20回演奏会

フィンランド独立100周年記念

シベリウス 交響詩《フィンランディア》(合唱付き)

〈休憩〉

ベートーヴェン 交響曲第九番 ニ短調 作品125 「合唱」

第1楽章: Allegro ma non troppo, un poco maestoso
第2楽章: Molto vivace
第3楽章: Adagio molto e cantabile
第4楽章: Presto

独唱 小林 沙羅(ソプラノ)
林 美智子(メゾ・ソプラノ)
福井 敬(テノール)
宮本 益光(バリトン)

指揮 小松長生

合唱 東京フロイデ合唱団
合唱指導 富澤 裕

管弦楽 日本フィルハーモニー交響楽団

2017年12月10日(日)

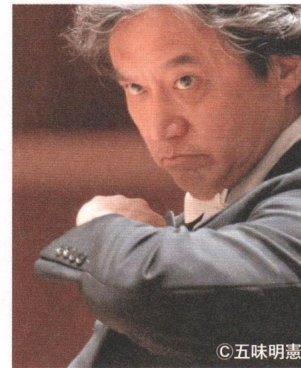
東京芸術劇場コンサートホール

主催:東京フロイデ合唱団

後援: 国際連合広報センター/東京都/豊島区/東京都社会福祉協議会/
公益財団法人さわやか福祉財団/東京都生活協同組合連合会/
生活協同組合・東京高齢協

Profile

指揮者・ソリスト



©五味明恵

指揮 小松長生 Chosei KOMATSU

福井県生まれ。東京大学美学芸術学科、イーストマン音楽院大学院指揮科卒。エクソン指揮者コンクール優勝。パッファロー管エクソン派遣指揮者、ホルティモア響アソシエート、キッチナー・ウォーター交響楽団及びカナダ室内アンサンブル音楽監督、武生(たけふ)国際音楽祭音楽監督、東京フィルハーモニー交響楽団正指揮者等を経て、2011年よりコスタリカ国立交響楽団桂冠指揮者及び、セントラル愛知交響楽団名誉指揮者。これまでにモントリオール響、ケルン放送響、ブラハ放送響、北ドイツフィル、ボリショイ劇場、キエフ国立オペラ、ソウルフィル、香港フィル、モスクワ放送響、ヴェネズエラ国立響、「東急ジルベスターコンサート」、「題名のない音楽会」、「NHK BS プレミアム」、「NHKららら クラシック」、TBS「砂の器」(千住明作曲、羽田健太郎/日本フィル)、ベルリン・フィルハーモニー創立50周年記念日独第九演奏会、トヨタ・レクサス用マーク・レビンソン搭載10周年記念CD(新日本フィルハーモニー)などを指揮。五嶋みどり・龍、堤剛、ヒラリー・ハーン、ラン・ラン、小曾根真、ジェイムス・ゴールウェイ、レナート・ブルボン、石井竜也、谷村新司、東儀秀樹らジャンルを超えたアーティスト達とのコラボレーションも注目を集めている。2017年9月釜山マル国際音楽祭(韓国)に招かれ、メインコンサート3プログラム(3交響曲、4協奏曲等10曲)を指揮(演奏:セントラル愛知交響楽団)し、絶賛を博した。金城学院大学教授。音楽芸術学博士。著書「リーダーシップは「第九」に学ぶ」(日本経済新聞出版社)。オフィシャルウェブサイトhttp://www.c-komatsu.com



©NIPPON COLUMBIA

ソプラノ 小林 沙羅

Sara KOBAYASHI

東京藝術大学及び同大学院修了。2010年度野村財団奨学生、11年度文化庁新進芸術家在外研修員。14年度ロームミュージックファンデーション奨学生。10~15年ウィーンとローマにて研鑽を積み演奏活動を行う。2017年3月、第27回出光音楽賞受賞。06年「バステリアンとバステイエンヌ」バステイエンヌでデビュー後、東京芸術劇場「トゥーランドット」リユー、日生劇場「ヘンゼルとグレーテル」グレーテル、兵庫県立芸術文化センター「こうもり」アデーレ、新国立劇場「パルジファル」花の乙女等に出演。12年ソフィア国立歌劇場「ジャン・スキッキ」ラウレタで欧州デビュー、海外へも活動の幅を広げる。15年野田秀樹演出、井上道義指揮「フィガロの結婚」にスザンナ役で出演し好評を博す。17年「カルメン」ミカエラで藤原歌劇団に初出演を果たした。14年デビューアルバム「花のしらべ」をリリース。16年セカンドアルバム「この世でいちばん優しい歌」をリリース。藤原歌劇団団員。オフィシャル・ホームページ http://sarakobayashi.com/



©Toru Hiraiwa

メゾ・ソプラノ 林 美智子

Michiko HAYASHI

東京音楽大学卒業。桐朋学園大学研究科、二期会オペラスタジオ、新国立劇場オペラ研究所第1期修了。文化庁派遣芸術家在外研修員としてミュンヘンに留学。2003年国際ミロプロス声楽コンクール最高位入賞。第5回ホテルオークラ音楽賞受賞。二期会、新国立劇場を中心に数多くのオペラに出演、2015年には紀尾井ホールにて「オリオンピーアデ」のアルジェーネ、日生劇場にて「ドン・ジョヴァンニ」エルヴィーラ役と、初役に挑み卓越した歌唱と抜群の存在感を示した。チョン・ミンフン、パーヴォ・ヤルヴィなど国内外の指揮者と主要オーケストラに共演を重ね、人気、実力ともに群を抜くメゾ・ソプラノとして活躍する。CDは、「赤と黒」「地球はマルイゼ〜武満徹:SONGS」、「ベル・エクサントリック〜林美智子・ベル・エボック歌曲集」をリリース。オフィシャル・ホームページ https://hayashimichiko.themedia.jp/



テノール 福井 敬

Kei FUKUI

国立音楽大学大学院修了後、文化庁オペラ研究所を経て、給賞を受け渡伊。二期会「ラ・ボエーム」でのデビュー以来、群を抜く輝かしい声と卓越した表現力で長きに渡り我が国を代表するテノールとして活躍。近年では「オテロ」、「ドン・カルロ」、「パルジファル」、「トリスタンとイゾルデ」等に主演し絶賛をされた。'15年セイジ・オザワ松本フェスティバルでは世界最高峰のアーティストが集結した「マエストロ・オザワ70歳バースデー・コンサート」に唯一日本人男性アーティストとして招かれ、'16年にはZ.メータ指揮ウィーン・フィルと「第九」で共演。'17年11月「六騎〜こころを歌う」、12月「アマリッリ麗し」と、立て続けに新譜をリリース。'18年2月二期会「ローエングリン」に主演予定。芸術選奨文部科学大臣賞、芸術選奨文部大臣賞新人賞、出光音楽賞、エクソンモバイル音楽賞洋楽部門本賞、イタリア声楽コンクール・ミラノ大賞等受賞。国立音楽大学教授。二期会会員



バリトン 宮本 益光

Masumitsu MIYAMOTO

東京藝術大学卒業、同大学院博士課程修了。「ドン・ジョヴァンニ」タイトルロールで衝撃的な二期会デビューを飾り、近年では新国立劇場「鹿鳴館」清原永之輔、「夜叉ヶ池」学円、二期会「こうもり」ファルケ、「チャールダーシュの女王」フェリ、日生劇場「メデア」イヤソン、「リア」オルバニー公爵、神奈川県民ホール40周年記念「金閣寺」溝口、あいちトリエンナーレ「魔笛」パパゲーノ等、常に大舞台で活躍。コンサートでも「第九」や宗教曲で主要オーケストラと共演。古典から現代、邦人作品までレパートリーは幅広く、最近ではH.K.グルーバー作曲「フランケンシュタイン!!」での軽妙洒脱なパフォーマンスが話題となった。また演奏のみならず、作詞、訳詞、執筆、企画、演出など多彩な才能を発揮し、創造性溢れるステージで聴衆を魅了している。CD「あしたのうた」、「碧のイタリア歌曲」うたうたう 信長貴富歌曲集等をリリース。聖徳大学音楽学部准教授。二期会会員。



合唱指導 富澤 裕

東京声専音楽学校卒。同校オペラ研究科修了。作曲を西崎嘉太郎、青島広志の各氏に、指揮を野口政男、小林研一郎の各氏に師事。1995年、沖縄日伊オペラによるオペラ「阿蘭和利」(新垣壬敏作曲)の初演を指揮。以来、合唱やオペラの指揮者として活躍。近年は、子どものための音楽に意欲を持ち、音楽之友社の雑誌「教育音楽」に作曲、編曲を連載。その多くがCDとなり広く歌われている。Believe、COSMOS、Tomorrow、君をのせて、旅立ちの時〜Asian Dream Song〜、鳥唄など、中高生が一度は歌ったことのある曲を多数編曲。公認レクリエーション・インストラクター、公認キャンプインストラクター、余暇生活開発士など多彩な面を持つ。



ピアノ 江原 郊子

桐朋学園音楽大学卒業後、渡仏。パリにてピアノをジャン・ファシナ氏に師事。エコール・ノルマルドゥ・ミュージックにて室内楽ディプロム・スーパーウルを取得。フランス各地で演奏会を行う。ピアノ名曲集(CD全10巻)をリリース。現在、エコール・ド・ピアノで後進の指導に当たるほか、ソロ活動、室内楽、伴奏等を積極的に行っている。東京フロイデ合唱団第10回、第15回演奏会「合唱幻想曲」でソリストを務めた。http://www.ecoledepiano.net



ヴォイストレーナー 越智 容子

国立音楽大学声楽科卒業。声楽を名倉省三、名倉佳子、小野邦代の各氏、発声法を森昌彦氏、音楽家の身体法「ディスボキネシス」を福富祥子氏に師事。佐野市民合唱団「VOICE」[宇都宮第九合唱団]指導者などを経て、現在「東京フロイデ合唱団」ヴォイストレーナー、「宇都宮聖ヨハネ教会クワイアアインズ」合唱指揮者。音楽教室「ぐるーぶ・オメガぼし」主宰、日本聖公会北関東東教区執事。また、フルリーナのペンネームで富澤裕氏の作品の作詞などライターとしての活動も行っている。